

ない人にはなかなか口を開かないそうである。しかし、面接に如田さんが通訳として同席してくれたおかげで、われわれの調査はスムーズに進めることができた。

われわれの彼女らに対する質問の内容は、次の四つに要約される。

- ① どのようにして日本に行ったか。
- ② 日本ではどのような生活をしてきたか。
- ③ どのようにしてタイに帰ってきたか。
- ④ 現在タイでどのような生活をしているか。

以下のところで、彼女らの話しを要約して述べることにする。

(1) Pさんの場合

彼女は1968年の生まれで現在32歳である。子どもはいない。というのは、子どもを人工授精以外に生めない身体になっているからである。今までの「仕事」が、彼女を子どもを生めない身体にしてしまったとのことである。現在は、彼女が生まれ故郷に建てたかなり「立派な」家で、内縁の夫と一緒に住んでいる。彼女は彼と正式な結婚をしていない。この理由は、「男を信用できない」というところにあるようだ。現在のところ、彼女は「性」と関係するような仕事はしていない。

隣に建っている「普通」の家に母親が一人で住んでいて、彼女はその面倒をみている。父親は大分以前から、新しい女性のところに行って家にはいない。この母親は現在アルコール依存症である。彼女には兄がいる。この兄は現在刑務所に入っている。罪名は殺人。彼は妻をピストルで殺してしまったのである。

彼女は小学校を出るとすぐに、バンコクの性産業にセックス・ワーカーとして働きに行った。多分、親に売られたものと思われる。彼女の話しでは、当時は本当に貧乏で、食べるものにも欠いていたそうである。母親が自分は食べないで子どもたちに食事を与えるという生活が続いていたようだ。

小学校を出たばかりの女の子が、家計を助けるために外へ働きに出る。しかも、かなりの額のお金を稼がなくてはならない。とすれば、セックス・ワーカーとして働く以外に彼女には選択の余地がなかった。彼女の場合は、たとえ売られたとはいえ、承知の上での出稼ぎである。泣く泣く行ったのではないようだ。当然のこととして、そして何もわからずにバンコクに行ったのである。当時は、彼女のような形でセックス・ワーカーとなる女の子が、この地方では多かったそうである。

そこで働いている内に、仲間からより稼げるところとして「日本」の話しを聞いた。躊躇することなく、彼女はその話しに乗った。

彼女は2度日本に稼ぎに来ている。1回目は20歳前後の頃で、5年ほど新宿で仕事をしていた。この時は「成功」であったと彼女はいう。帰国してすぐに、彼女は再び同じ目的で来日した。もっと稼ごうと思ったのである。しかし、2回目は惨憺たる失敗であった。成田から千葉県の新原市のスナックに連れて行かれた彼女は、そこで5～6人の仲間のタイ人女性と共謀して、その店のシンガポール人のママを殺すという殺人事件を起こしてしまうのである。この事件は、「新原事件」として日本ではかなり大きく報道された事件である。

彼女は殺人事件の当事者として、6年の実刑判決を受ける。その後、栃木刑務所に4年と少し服役して帰国することになる。3年ほど前に帰ってきたばかりだ、と彼女はいつていた。帰国後は、精神的なダメージが大きく、尼になって修行したりしたそうだ。最近になってやっと気持ちが少し落ち着いてきたと彼女はいつていた。

以上がPさんの略歴である。以後のところ、もう少し詳しく彼女の「歴史」をまとめてみたい。

彼女が日本に来るに当たっては、1回目も2回目も、タイのエージェントに頼んでいる。いずれもマレーシアの偽造パスポートで成田から入国している。この理由は、タイのパスポートでは、日本へのビザが取り難いからである。資料によると、日本は、1991年以降、年間平均で6,000人のタイ人にしか、労働ビザ、または訓練ビザを交付していないそうである。万のオーダーで日本に入国している現実を考えれば、タイ人にとって、日本に「正式」に来ることがいかに難いかわかるだろう。それにしても、彼女は不思議なくらい偽造パスポートで日本に密入国するということに抵抗を感じていない。この抵抗感の希薄さは、彼女だけではないようである。セックス・ワーカーとして日本に来る女性たちは、密入国をするという罪の重さを知らないのではなかろうか。

最初の来日に当たって、彼女はエージェントに250万円の借金をしている。驚いたことに、この大金を彼女はわずか2ヶ月で返したそうである。当時の売春の値段を聞いてみたら、彼女は、ショートで3万円、オールナイトで4万円だったといつていた。それにしても、彼女はかなりの「重労働」をこなしていたことになる。

彼女が勤めたスナックは新宿である。そこのママさんは台湾人で、とても親切であったそうだ。ここでいう「親切」という意味は、客は選べるし、外出も自由で、あまり拘束されなかったということである。このような「好条件」の職場で、彼女はせっせと貯金をし、家にはかなりの額のお金を送金した。もちろん、オーバーステイの彼女が、「表」の銀行から送金できるはずがない。お金はすべて「裏」の銀行？を通して送金したそうである。

この店で5年ほど働いて、彼女は帰国する。その方法は、同じ目的で来日しているタイの女性の偽造パスポートを買うのである。このパスポートは短期滞在でまだ出国までの日数が残っている。その期間中に写真を張り替えて使うのである。彼女は「金持ち」になって村に帰っていく。しかし、村の人たちは必ずしも彼女を「歓迎」という態度では迎えなかったようだ。この点について、彼女は「村の人は、私が日本でそのような仕事をしていたということよりも、私がお金を持っているということに嫉妬しているためではないか」と言っていた。

1度目の成功で、彼女は帰国後に再び日本に出稼ぎに行くことを計画する。今度は、部屋代と食事代を払わなくてもよいという条件で、エージェントに300万円ほどの借金をする。しかし、この借金は、茂原のスナックに来た時には380万円になっていたそうである。彼女が自分で千葉県茂原の店を選んだわけではない。受け手の日本のヤクザが彼女たちを勝手にあちこちのスナックに配分するのだそうだ。

今度の店のママさんはシンガポール人である。この店のママさんの管理はかなり過酷であったようだ。もちろんパスポートは取り上げられ、買食い、外出の禁止、客は選べないのである。食事也是十分には与えられず、その上昼間には何のためかよくわからない庭の穴掘りを繰り返させられたそうである。彼女たちの住居も相当に悪かったらしい。6畳一間の汚い部屋に5～6人押し込まれていたようだ。「特にトイレが汚くて困った」と彼女は言っていた。彼女たちは「性奴隷」に近いような生活を強いられていたようである。

こんな劣悪な環境の中で、彼女は「売れっ子」として働き、3ヶ月で200万円を返したそうである。しかし、それが彼女の限界であった。彼女だけでなく、他の女性も「このままでは殺される」と思ったそうである。彼女たちは、何時もお腹をへらし、身体も毎日の肉体労働で疲れきっていたのである。こんな状況の中で、彼女たち全員が共謀して、凶悪ではあるが悲劇的な「ママ殺し」という「茂原事件」を引き起こしたのである。この事件の詳細については、日本における彼女のサポーターの協力で、1998年に現代書館から日本語の本が出版されているそうである。書名は「タイからのたより」。目下、われわれも手配中である。

以上がPさんの物語りである。話しが事実であるだけに迫力がある。われわれは、強烈な印象を受けた。彼女の対照的な2度の「日本体験」のいずれが現実なのだろうか。前述の大久保のヘルプでの調査結果(II-2-2)から考えると、最近はますます彼女たちは過酷な状態で働かされているのではなかろうか。「性奴隷」を輸入するようなことを、われわれは断じて許してはいけないと思

う。

彼女は今、内縁の夫と共に比較的平和な生活をしている。その合間に、彼女は、日本に行って稼ぎたいと考えている村の娘たちに、彼女の経験を話し、思い止まらせるようにしているそうである。「このことで、何か私にできることがありましたら、何時でも連絡して下さい」というのが、彼女のわれわれに対する別れの言葉であった。

(2) Rさんの場合

Rさんは30歳を少し過ぎたぐらいの年齢である。彼女には子どもが2人いる。1人は小学校の1年生の女の子である。その下に現在の夫との間にできた男の子がいる。上の女の子は、彼女が日本にいた時に、日本人の同棲者との間にできた子どもで、帰国してから産んだそうだ。その彼との連絡はついていない。日本人とそっくりのその女の子は、友達も多く、小学校では先生にとっても可愛がられているそうだ。皆とは一人だけ違った顔をしているこの子がわれわれに挨拶に来た時は、気持ちが萎縮したというか、とにかく、いいようのない複雑な気持ちになった。

Rさんが今気にしていることは、上の女の子のタイ国籍がなかなか取れないことである。この理由は定かではないが、村の役場に行っても、また県の窓口に行っても、届け出を直ぐには受理してくれず、何かと理由をつけて「お金」を要求されて困っているとのことであった。

彼女が日本に出稼ぎ行ったのは、もう10年以上も前のことである。彼女の場合は、姉が日本にいて、すぐ上の姉と彼女の2人を日本に呼んだようである。日本にいる姉は、すでに日本人と結婚していて埼玉県の大宮に住んでいる。この姉から、彼女たちは日本のおおよその事情を聞いていた。したがって、彼女が日本に行くことについては、特に堅い「決心」をすることもなかった。それに、もう1人の姉との日本行きである。この点が、他の日本を目指した娘たちと大きく違うところである。

彼女は日本での仕事がセックス・ワーカーであることは知っていた。そのことを承知の上での来日である。このことから考えると、彼女はタイにいる時から、性産業で働いていた経験があるのかも知れない。タイの北部の農村では、経済的な疲弊のために、娘が性産業で働くことはそんなに珍しいことではないそうだ。さらにいうならば、日本に働きに行く女性の多くは、若い時はタイの国内でセックス・ワーカーとして働き、ある程度歳をとってから日本に行く例が多いそうである。

とにかく彼女は、日本へはタイのエージェントを通して行っている。この時

に200万円以上の借金をしたそうである。用いたパスポートは、写真を張り替えたマレーシアの偽造パスポートである。この時に同行した数人の中には、タイ人だけでなくカンボチア人も混じっていたそうだ。このようにして、彼女は成田から日本に入国した。

彼女が「分配」されたところは甲府市内のスナックであった。この時の条件は、6ヶ月間無給で働くこと、そしてその後は自由である、ということであった。ここで「売春業務」をさせられることになる。この店のママさんはタイ人で、その夫は日本人のヤクザであったそうだ。この店には、Rさんのような女性が6人いた。

この店の彼女らに対する「管理」は相当に厳しかった。もちろん客は選べないし、雑用も多かった。また、住んでいた部屋もすし詰でひどいものであったそうだ。しかし、彼女が何よりも辛かったのは、毎日の食事であったという。「味」の話ではない。「量」の話である。ママさんから6人分の1日の食費として1,000円渡される。何を食べてもよいといわれても、その金額では6人の誰もが空腹を満たすことができなかった。6ヶ月のタダ働きという契約なので大した現金収入はない。とすれば、高い利子を払ってママさんに借金するか、それとも夜のお客さんにおごってもらうか、チップを貰うかする以外に空腹を満たす方法はない。これが彼女にとって一番辛かったそうである。

ここに3ヶ月働いていたが、彼女はついに逃げ出す決心をする。もちろん、逃げ出したりするとどんな目にあうかを彼女はよく承知している。そのことについては、常々ママさんから脅かされていたからである。しかし、彼女には逃げ出す先があった。それは大宮の姉のところである。この点が、他の5人の女性たちと彼女が違っていたところである。彼女は1人で「逃亡」を決行した。幸いに、ママさんもヤクザも、大宮に住む彼女の姉のことは知らなかったらしい。彼女は姉のところへ1ヶ月ほど居候したが、その間にヤクザからの追跡はなかったそうである。

その後彼女は、喫茶店などでアルバイトをしながら暮らすようになる。この間、姉からの援助があったことは想像に難くない。やがて彼女は、埼玉県川越市のあるスナックに新しい職を見つける。ここのママは台湾人で、彼女はRさんの事情を知って雇ってくれたそうだ。もちろん、セックス抜きの仕事である。時給1,000円。以後彼女は、ヤクザからの追及もなく川越で安定した暮らしをするようになる。この町には3年ほど暮らしたらそうである。

生活は安定したが、時給1,000円では思っていたようなお金は稼げない。しかし、甲府のスナックを逃げたことによって、今までの借金は棒引きになっている。彼女は少ない収入の中から家の方に仕送りを続けた。

川越で彼女は日本人の恋人を見つけた。このことは、彼女にとってどんなにか心の支えになったことだろうか。やがて彼女はその人の子どもを妊娠する。その後の事情はよくわからないが、とにかく彼女はその恋人を別れることになる。多分、その男が逃げたのではないかと思う。そして彼女は、お腹に彼の子どもを抱えたままで帰国を決心した。この間、彼女が日本に滞在したのは約5年、この期間は彼女にとって短かったのだろうか、長かったのだろうか。定かではないが、彼女の場合は、オーバーステイとして日本の入国管理局に出頭したものだと思われる。

Rさんは今、母親の家の隣に小さな家を建ててタイ人の夫と2人の子どもと一緒に暮らしている。夫は日雇いをしたり、魚とりをしたりしながら生計を立てているようだ。小さな畑もあるという。貧しいながら平和な生活を送っているように思われる。丁度、彼女の家の斜め前に、立派な家が建築中であった。外国で稼いできた人がその家を建てているとのことであった。彼女に「あなたは立派な家を建てられませんでしたね」といったら、彼女は明るく笑いながらうなずいていた。

意外に思ったことであるが、彼女は、日本に対してあまり悪い印象を持っていないようだった。姉が現在日本に住んでいるせいもあるのかもしれないし、また、川越での生活が、彼女なりに満足のいくものだったのかも知れない。彼女はまた日本に行ってみたいといていた。しかしその時は、正規のパスポートをもって、子どもたちと一緒にいきたいそうである。子どもたちに、自分が行きたくて行けなかったディズニーランドをみせてあげたいのだそうだ。しかし、今のところ、この一家にとって日本はあまりにも遠い。

帰り際に、彼女は、この村にも日本に行ってお金を稼ぎたいといている娘が何人もいるといていた。村長さんの娘もそんなことをいっているようだ。彼女はこのような娘たちに、機会がある毎に日本で経験した自分の恐ろしい体験を話して聞かせるが、彼女らは聞く耳を持たないという。彼女は説得のむなしさに心を痛めているようであった。この村にも、最近のタイの急激な物質志向の潮流が押し寄せて来ているようである。

4) まとめ

量的調査の結果を分析した結果、タイ女性の結果は、他国の女性の結果と比較していくつかの異なった傾向を示していた。たとえば、今回の調査で、タイと同じように対象者数が多かった韓国女性とタイ人女性を比較すると、タイの女性の方が、来日に当たって多額の負債を抱えている。にもかかわらず、タイ人の女性は、再び日本に戻りたいと答えたものが多い。また、タイ人は売春